

雑誌「コギト」

—戦時下の様相—

高橋 渡

(本名・中山渡)

1

昭和6年(1931)の満洲事変に始まり、太平洋戦争敗北までの、いわゆる十五年戦争下、保田与重郎を中心とする雑誌「コギト」(創刊・昭7・3→終刊・19・9)、雑誌「日本浪漫派」(創刊・昭10・3→終刊・13・8)に拠った人々、また浅野晃・林房雄らのような雑誌の周辺の人々も含めて「日本浪漫派」と呼称し、文学史的にそれらを一括してウルトラ・ナショナルリストの集団とし、雑誌をその牙城とする考えが根強い。そして、文学の質も文学者の資質もあえて問わずに、戦争協力の一点から否定的に評価し、個々の作品を見すぎす傾向が一般的である。かかる傾向に批判的な、例えば「現代文学史の構造」の大久保典夫らは、むしろ、今日も少数派と言えよう。

これには、戦後日本の思想的な動向、感性の作動傾向が基本にあり、戦後最も早く文学者の戦争責任を追及した「文学時標」(1946)の「文学検察」欄にみられるような審問官的な断罪をはじめとして、「精神形成史をふりかえるとき、その基本構造を決定したものがマルキシズムの方法」と述懐する、戦中派橋川文三の「日本浪漫派批判序説」(昭32・1957)、あの緻密で説得力もある著作にいたる批判と研究の影響が大きかろう。

ところで、雑誌「コギト」が戦争といかに関ったか、言われるように超国家主義の牙城であったのか、火野葦平「麦と兵隊」によって今も語られる徐州会戦、それを転機に日支事変が拡大一途の歩みをはじめた昭和13年(1938)と、太平洋戦争、当時の大東亜戦争の勃発翌年の17年に絞って検討してみたい。とともに、雑誌の中軸になり、しかも新進評論家として文壇的に活動をはじめた保田与重郎のいづく文学観、戦争観を追ってみたい。そして、これらを通して、旧制大阪高校の同級生を母体とする雑誌「コギト」の同人雑誌らしからぬ特質も考えてみたい。

2

日支事変は12年7月、北京郊外の蘆溝橋において始まり、6年からの満洲に加えて華北、華中に戦火は拡大された。それが、13年1月、「国民政府を相手とせず」の内閣声明によって拡大一途の泥沼となり、4月には言論・思想までを戦争目的に統制できる「国家総動員法」の公布となり、軍部主導による戦時色の濃い時代となったのである。7月には日本ペンクラブが国際ペンクラブを脱退し、9月には久米正雄ら二十二名の作家が軍の要請で漢口攻略を観戦のため従軍している。

この13年は、「コギト」同人は大学を卒えて四年、その多くは二十八歳を迎える年である。その3月、保田与重郎は同人雑誌について重要な発言をしている。それは70号の編集後記で、前年、論争もした高見順らの「人民文庫」の廃刊を聞き「文化に対する意志として出すべきである」と言い、一般論として「非常時を口実に文化事業を停止するのは卑怯無責任である」とも言い、同人雑誌の整理という官権の動きを耳にし、「厳然とした事実、同人雑誌作家だけが、文化と民族と国家と人類を思つて無償で聖職に甘んじてゐるのである。この精神は方今の日本の既成宗教家からは地を払つてなくなり、その精神は戦場の兵士の精神に共通する唯一のもの」と強調している。

これは、7年、マルキシズムを含む広義の近代主義・モダニズムが分岐点に近づいている日、文壇予備門という同人雑誌の一般的性格を否定し、「共同の営為」として「コギト」を創刊して、目的意識の強烈なプロレタリア文学、方法

意識に傾斜するモダニズム文学に反発し、文学すること自体に生の意識をかきたてられる、高踏的な詩精神をもつ若い世代の文学運動を考えた保田らしい初心を貫く発言で、彼が自分らの雑誌に何を求めているのか、明白である。彼は「日本の橋」（11年）、「英雄と詩人」（同）の二著により文壇に進出し、前著により池谷信三郎賞も受けている新進評論家である。彼が「コギト」で求めようとして、創刊号の後記にしるした、文学に効用を求めず、文学をすることの生の意識を追求しようとする、文学への純粹な情熱はますます高揚していたのである。

この70号への寄稿は次の通りである。詩作品を伊東静雄・田中克己・真田雅男・芳賀檀・小高根二郎、短歌を三浦常夫・松下武雄・牛尾三千夫、評論に「エルテル論断片」の保田、「人間キリスト記」の山岸外史、「白鳳仏」の市原みどり、翻訳小説にインカ征服物語といえるワッサアマン「カクサマルカの黄金」の薄井敏夫、特別寄稿に「白馬」の詩人エルンスト・ベルトラムの芳賀宛書簡。このように同人も寄稿者も詩歌が多く、いかにも詩精神を尊重する「コギト」の初志は貫かれている。召集されて蒙古で軍務についている真田は硝煙に直接は関りのない、しかし、いかにも異境に兵士として出陣している青春らしい、曠野に晒される心象を雪原に倒れる鷺に仮托して長篇詩「青い鷺」に形象している。田辺元門下の哲学徒松下は病身のためか、シェーリングの「芸術哲学」の翻訳はこのところ連載を休んでいるが、「寒風」十七首を寄せ、

春浅み朝鮮の子らは水田にて田芹つみ居る物も云はなく
みじかかる命定まりて歌よまん心いよいよ極まりにけり

心裡をふきまく悲傷を凝視し、くぐもるような声調で表出している。かかる傾向は71号以降においても同じで、戦争によって高揚する心緒は保田だけでなく肥下恒夫の編集後記からも、あるいは麴町での雑誌校正の直後、漢口占領の報に思わず二重橋に赴く田中・三浦らの行動からも察せられるが、作品となるとそれを直叙せず、文学への昇華を意思している。これは彼らの默契のようなもので、「コギト」の骨格となっている。

73号(13年6月)には生々しい戦塵のただよう保田の「旅信」が載っている。これは佐藤春夫ら三人で朝鮮から満洲へ、更に華北、蒙古と四十日余りの大陸旅行を5月から続けた折の紀行で、これを手はじめに74・75・77・78号と続け、年末に生活社から刊行される「蒙疆」に収めている。この紀行は後に触れるが、自在な耽美的姿勢の目立つ、詩的幻想の奔放に溢れる詩的散文といたい作品である。この73号でも戦争が直接に反映するのは「旅信」の一本、これは76号まで同じである。しかも、75号には「熱河」の長文が載り、支那の今昔が躍動感豊かに論じられ、康熙帝にはじまる、長城をはるか北に越えた秘境にある熱河離宮、その荒廃した現状から往古の結構の壮大な美を語る文章の次には、「わがひとに与ふる哀歌」の形而上的な思想詩、そのニヒリズムの世界から脱して新詩境——内部と外部との調和を回転軸にして自己の内面に熟成するものを凝視しようと沈静する、いわば、典雅清冽な「詩集夏花」の世界に確実に転位した伊東の作品を並べるのである。

夜の葦

いちばん早い星が 空にかがやき出す刹那はどんなふうだらう
それを 誰れが どこで 見てゐたのだらう

とほい湿地のほうから 闇のなかをとほつて葦の葉ずれの音がきこえてくる
そして いまわたしが仰見るのは揺れさだまつた星の宿りだ

最初の星がかがやき出す刹那を 見守つてゐたひとは
いつのまにか地を覆うた 六月の夜の闇の余りの深さに 驚いて
あたりを透かし 見まはしたことだらう

そして あの真暗な湿地の葦は その時 きつとその人の耳へと
とほく鳴りはじめたのだ

「詩集夏花」に拠って写したが、初出では現行の第二連が一行一連の二つの連になっている。光と闇——永遠のなかの現在にあって、その永遠の生命に参入する浪漫的詩心がみごとに光耀するこの作品で「熱河」との照応を図り、雑誌に文学的な緊張、拡散に対する凝集感を与える編集となっている。これをどこまでこの号の編集者肥下が意識したかは分からないものの、ともあれ、雑誌に詩精神は貫かれ、時代の渦に巻き込まれていない。

ところで、この年8月、田中は大阪での教職を捨て、詩「虹霓」(75号)を残る伊東に献じて東京定住を決行。中島栄次郎は召集され、後にフィリップピンで戦死という悲運の第一歩を踏み出している。

その秋、77号(10月)には、珍しく戦時ならではの作品が並んでいる。真田の小品「蒙古」、保田の「旅信」(「蒙疆」では「北寧鐵路」に改題)、田中の詩「死者に敬礼せよ」、小高根の詩「桐の実」がそれである。田中、小高根の作品は戦死した友への追悼詩である。真田の小品は再び編集を担当する保田が編集後記で、「現地報告で書けなかった別箇の美しい戦場と戦士の意識(かりに新しい文学意識と云はう)で書かれてゐる。この文学は一行も事件や戦争をのべてゐない。軍隊も出ぬ。兵士の姿も出ぬ。ただ目にふれた小さい風物への感興を誌して、その底に事変と大陸と日本の叡知が謙譲にたたへられてゐる。」と言ひ、「生死の征戦を大砂漠につづけた日本の一兵士の作品」と讃える通りのもので、メルヘンの香気すら漂っている。真田は78号にも「雁」を寄せているが、その末尾、敵襲を用心しながら十分の間をとって車列は進む、その部分を引用してみよう。

……日没のとき、前の車が雪の中に滑った。号笛のしらせですべての車は一どきに停車した。運転手たちは車輪のまはりの雪を交替して掘った。僕は雪の上にくづくまつてそれを眺めてゐた。形容できない文字が雪の風景をひろげてゐた。そして太陽は向ふの山の頂に沈んでゆく。最後の火華がはげしく雪を掘る人たちと車輪とを照した。僕

の運転手の額には大粒の汗がいくつもきらめいてゐた。雪の上には服が無雑作に脱いであつた。太陽は次第に小さく沈み、妙にいびつにゆがんできたやうに思つた。雪までが紅くなつてゐた。そして来光のやうな輝かしい風景。殆んど陽が沈みかけて一きは明るくなつたとき、山のいただき低く雁が八羽、列をなして太陽のまばゆい偉大な光束の奥に消えていつた。

こういう沈静さ、抒情すら抑止しつつ翳りのない眼を光らせている文章で、真田の資質は戦線の日々も磨かれていくのである。

これらのほか、77号は服部正己の前号からの訳詩「ニーベルンゲンの歌」、田中は新たに史論「埃及の女王クレオパトラ」(後、「楊貴妃とクレオパトラ」に収め、16年透谷賞)の連載を始め、薄井は発展する都市に視点をおくフライタアクのドイツ中世史論「或る都市の街頭より」の翻訳を続けている。創刊号でいう「最も深く古典を愛する」、古典を愛し、それを「殻」として愛しては破り、多彩豊饒に文学の新生を図ろうとする初心を貫く編集ぶりである。また、詩歌は前述の二人のほか、三浦常夫、池沢茂ら四人が寄せ、この点にも、同人の多くが専門領域外の詩歌にいたく関心の深さ、このグループらしい文学意識が感得され、「コギト」という雑誌の幅の広さ、層の深さが理解できる。戦火がいつ収束するのか不明な、硝煙の立ちこめる日々々の彼らの文学意識がいかなるものか、むしろ、現実に沈潜もすれば超脱もし、現実としての戦争を超えた高踏的な詩心の在処すら思いやられ、かかる地盤があつたからこそ、保田における評論、伊東・田中・蔵原伸二郎における詩の開花があつたことを実感させられる。

78号は田中の「詩集西康省」の出版記念号である。特に注目すべきは保田の「文学史的な感銘」で、昭和詩における田中克己の位置づけ、詩業の開示した特質の認識にみられる鑑識眼は、さすが、少年期からの知己の言との思いを深くさせられる。また、79号は10月に二十八歳で夭折した松下武雄の追悼号で、いわゆる追悼の枠を越えた真率なもので、辛辣なまでに互いを熟知しあっている友情、連帯感が交響し、中島の「宇宙的莊重の評論」、保田の「文芸批評のアカデミズム」は哲学専攻の評論家松下を、田中の「孤高のしらべ」は詩作せざるにはいられない松下の文学意識を捉え、

その遺稿集「山上療養館」の短歌・詩と並んで貴重なものである。

13年をこのように了えた「コギト」は、三年経って大東亜戦争を迎え、どのような様相を示しているだろうか。三十歳を一つ二つ越え、当時の意識では壮年期である。ヨーロッパではすでに14年に第二次世界大戦が勃発。伊東静雄を「自分の頭脳は果して戦争に堪へるだろうか」（日記）と悩ませた戦争は西でも拡大一途、英米連合国による対日経済封鎖は日米決戦の機運を民衆レベルでも醸成していた16年、戦争体制に文学界も傾斜、一國一党的な「翼賛体制」に規制されていたのである。そして、12月、開戦。

これを受けての114号（17年1月）は、巻頭に保田の万葉集論の一環である「可奈流麻考」を据え、伊東、山田新之輔、江頭彦造の詩、森亮の唐詩の翻訳、杉山悠起雄の短歌、棟方志功、長尾良の小品、小高根、伊藤佐喜雄の小説、田中の日記で構成し、わずか六十三頁の小冊子として発行されている。編集後記には、「大詔の一度渙発せらるゝや、忽ちに国際謀略は霧散し、吾らは神州不滅の信仰と肇國精神が今日に新なるを覚えたのである。神勅に示される建国の思想は、つねに、永遠な国体維持の神話である。」の文言もあり、非文学言語、硬直した文体であり、国をあげて叫ばれていた「承詔必謹」と同一の発想ともいえるが、これは執筆者の保田だけでなく、いわば同人の述志であり、濃淡にちがいこそあれ、後述する「文明開化」に対する彼らの生の意識のいつわりのない表白であったのである。

この後記のほか、戦争を直接的に素材とした作品は、伊東の詩「大詔」と杉山の短歌「大詔を拝して」だけである。伊東の「大詔」は保田の後記と照応するものとも言える。

昭和十六年十二月八日

何といふ日であつたらう

清すがしさのおもひ極まり

宮城を遙とほ拝すれば

われらことごと尽く

という、民衆レベルの発想とも日常的次元の発想ともいえる作品で、詩集「春のいそぎ」(18年)に収める七篇の戦争詩のうち、伊東らしい沈潜さ、想像力のしなやかさ、思念の切実さに欠け、117・118号の「つはものの祈」「海戦想望」のみごとな結晶度に比べて、余りに即事即興にすぎると言えよう。わずかに「清しさのおもひ極まり」に北村透谷以降の浪漫派の悲嘆「東洋の衰運」からの解放、保田のライトモチーフ「文明開化の終焉」への共感なども錯綜、凝縮していると言えようか。とはいえ、この作品が「十二月八日」を素材とする当時の戦争詩、他の文学作品と比べ、突出したイデオロギー、低俗な流行的な発想のものでないことは自明である。

田中の日記は開戦当時の九日間の日録、簡潔な筆致の、詩人の目の抑制の利いたもので、戦争への心意が語られ、時代の青年の心象が鑄込められてい、戦争に対処する田中の求心的な心的状況が鮮明である。

これらのほかは時局戦局に関りのないもので、戦後詩壇で活躍する若い江頭彦造の詩「湖に……」は形象力に脆弱さはあるものの、青春の哀感、鬱屈する心情が抒情されており、山田の「夜中の貨物」は大陸の原野を疾走する貨物を幻視しながら、荒涼とした孤独な憂悶、その実存状況を表現したものである。小高根と並ぶ伊藤の小説「春の鼓笛」はこの号から始まる長篇、一年連載の、自伝的な青春物語といった性格をもつ浪漫性豊かなもので、教養小説という側面も持つ力作である。他の人々の作品もそれぞれの個性のにじむもので、長尾の小品「島の女たち」など、瀬戸内の島の女の生活の一断面を淡々と描きながら短篇小説の滋味すらあって、池沢茂らとともに「コギト」を代表する随筆の妙手の丹念な作品である。なお、巻頭の保田は万葉集に散見する「可奈流麻之都美」の解釈をめぐって国学者の諸説をも検討し、「かなぐり放つ間なり」の真淵説を採り、防人歌の難解な、

荒し男のい小^せ箭^や手^さ挟^まみ向^むひ立^たちかなる間しづみ出^でてと吾^が来^る

を、「防人に発つ朝の別れの悲しさに心のむせびかへるのを取りみださず、氣息をしづめて自分は別れてきた」と独自の解釈をし、「古典の解釈に於ては、時代精神の切実な用心と状態によつて、その解釈を深くもするし浅くもする」と、

古典解釈への姿勢を論じたもので、専門家と異なる発想のうちに生の意識と古典への愛の結合している保田らしい論考である。

この編集ぶりは次号以下終刊に近づいても基本的には変わることなく、ただ、雑誌の統廃合の進む時代の変転にともない三十頁前後の小冊子に、更に142号（19年5月）以降の八頁のパンフレット版にと姿を変え、用紙事情に加えて兵役に就く者も多く、往年の百五、六十頁の、執筆者も常に十名を越えてジャンルも多様な力作寄稿という充実ぶりは見られないものの、保田の言う「雄大に過激に展開した大戦争についてはもはや人力ではこの戦局を見定めることが不可能」（142号・あとがき）な、壮大なものの没落していく現実にあっても休刊しないのは「文学といふことを本気で考へる」同人の情熱があつてのことは疑問の余地がない。そのように文学界に対しても真の文学を求めることの重要性を訴え、保田は戦争のための「昂奮剤でもない、伴奏の行進曲でもない」（130号・戦争の出来る文芸）文芸の創造を言い、「詩でない愛国詩や、誠実さのない教訓文学をまき散らすことは、文学文化のために慎んでもらいたい」（131号・教訓小説のこと）と為政者・文化運動の指導者に注文し、文芸の効用主義を推進する戦争便乗の動向を厳しく否定している。

これら保田の時代への異言には、後にみる保田の戦争観、「聖戦」の意識がはたらいているものの、彼と同人たちの文学意識が時代に埋没せずに湧出し、「コギト」をナショナルリズムの牙城はおろか、文字通り旧制高校的な友情による「共同の営為」として互いの文学を求めた場としたのである。求めた文学は、プロレタリア文学、モダニズム文学の崩壊、変動の日における、更には戦時の日々における生の意識の探究に基づく表現活動、実用的目的意識を否定する純粹行為としての文学である。反リアリズムに立つ詩の創造と云つてもよからう。その時、文学意識の形成に大きく参与したのが洋の東西にわたる古典であり、そのことが、浪漫的な志向を懐きつづけたこのグループの文学の特質の一つで、詩精神の横溢する文学の創造への姿勢とともに留意すべきことであらう。

さきに触れたように保田与重郎は73号(13年6月)を始めとして74・75・77・78号に大陸旅行の紀行を寄せている。「旅情」・「感想」・「熱河」・「旅信」・「朝鮮の印象」がそれである。これらはリアルな現地報告を目的としたものではないものの、当然、戦時下の各地の状況、その不穏な様相も、日本人の一旗的な進出動向も生ま生ましく、長城を越えた内蒙古は包頭へ飛行機で鮪の刺身を運ぶ話までも伝えはするが、風土や歴史をふくめてさまざまな事象に触発されての感興を述べ、併せて、時代の変動する雰囲気伝えるところに作者の主眼はあるといえよう。感興といえ、それが詩的幻想にすら拡散し、おのが詩心を奔放に語るところに、この紀行の一つの特色がある。例えば、満洲から華北への車窓、曠野を眺めながらそこに聳える「芸術でなく、大きな結構」の、北方系帝国の築いた城郭や宮殿等の大建築を幻視し、あるいは、曠野は「民衆をいざなふさきに、英雄をいざなふ」ことを実感し、ここで展開される修羅、戦闘の無常迅速を思う。そして、言う。「遠い唐代詩人の遠征と勝利を歌った詩を見給へ。あれはあきらめや、ヒューマニズムではないのだ。曠野の誘ひは、すさまじい。さうしてそれは**茫大**な建設と破壊のイロニーである。」と。こういう飛躍と流動性にとむ筆致で、鬱結する心情の屈折を晦渋な、パラグラフ不能な文体に波動させながら、大陸と戦争に刺激される浪漫の詩心を語るのであるが、この一連の紀行は、なまな戦争観の如実に語られている点からも見逃せない。

日支事変を保田は楽天的に短期戦と考えているかと思うと、七年を越える長期戦を予測するかのようでもあり、見通しは持っていない。それは当然のことであるが、この戦争について77号「旅信」で、「アジアの民族として、同じアジアの民を非倫の境遇より解放する聖戦であるといふ浪漫のスローガンに私はやはり心から共鳴する」と述べている。これは満洲事変、支那事変を先導した軍部、後続便乗する政治家、実業家、官僚の大陸進出の思想とは異質で、自由民権派とも接点のある明治の浪漫的理想主義、または頭山満や宮崎滔天らに流れる、黒龍会などに拠るいわゆる大陸浪人のいづく大アジア主義の良質な部分の信条にもつながるものである。そして、この「浪漫のスローガン」は「五族協和、

王道楽土」が満洲国のスローガンとして掲げられ、特に青少年の主情的な良心をとらえたように、改めて、欧米列強の政治的経済的な東洋征服を実感させ、満洲事変前後からの思想と政治の混乱、停滞、深まる国家の孤立感と将来への不透明感、加えて経済生活の困窮を刺激し、やはり青少年の心を捉えたのである。その時、「非倫」と倫理性を付与して定言したのは誰か、おそらく保田もその最初の一人であろう。この非倫の境遇からの解放という戦争観は、日支事変だけでなく、大東亜戦争にも一貫する保田の戦争理念である。

「非倫の境遇」とは、この文章で繰返し言う「白人専制とアジアの植民地化」、明治の初期、若い志賀重昂がニュージールランドやオーストラリア、ハワイを巡航して驚愕しての言動を喚起喚情もさせる文言、それ以上に進行したアジアの現状を指し、「アジアの分割と隷属を永久づける理論」、十九世紀欧米発想の理論になじみきったアジア人の意識の現状も意味しよう。この「非倫の境遇」からの解放が戦争の目的であり、したがって戦争は「聖戦」と考えるのであるが、この時、保田にはなにもまして岡倉天心が浮び、神話神武東征が蘇っていたことは想像に難くない。「アジアは一つなり」——この言葉ではじまる「東洋の理想」や「東洋の覚醒」の天心こそ、内村鑑三と並んで「明治の精神」を体現した世人である。と論じたのは一年有余の前、12年2月（新潮・二人の世界人）のことである。精神に巣くう因襲を破って内にあふれる、内発的な世界への関心の具体化、日本文化を世界文化に高めるのが「明治の精神」で、その体現者として天心と鑑三を讃嘆する保田には「アジアは一つ」の理想の具現化を日支事変に求めたのは自然である。彼は天心に導かれ、その理想を純粹に理念に高め情念に溶解させ、彼自身の思念では政治的行為というよりは思想的、芸術的行為として、極めて主情的に意思しているのである。「支那人」は日本の理想の敵」であると、「理想の敵」と日本のもつ使命感を強く意識し、彼の言う前世紀の文化理論や思想をもつて戦争に対処しようとする日本の知識人は「我らの内の敵」とまで極論する。また、「八紘一字」、あの神武神話の発生地、大和の桜井を郷国とする彼は、ごく自然にロマンチストらしくその神話を今日の歴史的理念にイデーして些かも疑わず、清純なアジアの新生を夢みたのである。

非倫からの解放という聖戦意識をもつ保田は、これまた至極当然のこととして、この解放を単純な人道主義や帝国主義、ましてや近代の自由主義、共産主義でなく、十九世紀欧米のアジア専制に対する日本の純粹な良心、倫理の問題と

し、これを「日本主義」の発現と考え、前線にある兵士の心象にまで一般化し、「高度の日本人の——主に兵士たちの感覚は、やはり日本主義である」と言う。その概念は曖昧なもの、この「日本主義」は彼が他でしばしば論難する、マルクス主義の崩壊期に転向問題とパラレルに胎動した民族主義的なそれとも、また、日支事変の勃発後に戦争遂行の国策との関連で脚光を浴びる功利的便乗型のそれとも異なる、伝統的、農本的な色彩の濃い土着的な生活感覚に根ざすものである。例えば、この文章で「己らの手によつて父祖の祭祀と日嗣を三千年にわたり絶やしたことはない民族」という時の、稲穂の波を白髪の稲荷大明神の遊神する幻影を生む共同社会に人間の生活、というよりは暮らしの理想を求め、日本の風土感覚にもとづくもので、現実認識の論理ではなく、たぶん歴史への詩的感興に発する浪漫的な情念がその核心にあると思われる、極めて文学意識の濃厚なものである。

このように保田は戦争のなかに理想と浪漫を求めてその詩美を語りはするが、戦争の現実を全体的に凝視し、その実態を認識しようとも、あるいは、参加し行動しようともしない、そんな氣質の文人である。同じ「コギト」の同人でも、伊東静雄のように戦争を生活に関連づけては一喜一憂しつつ教職に励むことで生きようとする生活的実直さを持つてはいない。かかる氣質の、戦争目的を自己に手ぐりつけては追求し、理想の具現を意思する文学者であるから、彼は現地報告・ルポルターージュに関連し、神話から発想されるような報告でなく客観的なルポをという知識人の要求について、これを前世紀的な知識と理論が変革されている現地の現実を理解していないからの要求とし、この要求には現実への悲観論的消極的な見方があると論難し、次のような極論もするのである。「現地報告は新聞記者がしたようにすべて美談の形で表現されてよい、それで正しい、さうして、詩であれば一そうによい。一民族が昂揚してくるとき、歴史さへ大なる抒情を奏する。」と。戦争に、「非倫の境遇よりの解放」という明治から地下水となって流れる浪漫と、「聖戦」の新しい理念を発見し、その純粹培養を図るかのように「詩であれば」と言うのである。

その保田は、長城に日の丸を掲げる兵士を見て、次のように述べもする。

私は驚くべき浪漫的な兵士たちを見てきた。毎日長城の突端に日章旗をかかげるために、彼らはあへぎつ、その断

崖の城壁をはひ上るのだ。それは居庸の絶壁であつた。さうしてその兵士の——一人きりでゐる、その直立不動の姿に、どんな文学も活動写真も報告し得ない今日の日本の浪漫的象徴をはつきりと私は知つた。長城の山河を背景にしてそれは想像できない美しさであつた。歴史と風景が未来に拓かれてゆく瞬間の歌の一つの象徴主義である。それは北京でみられぬだらう。南京に見られるだらうか。私はどこでもよいこの一つで十分であつた。

ところで、「非倫の境遇よりの解放」を強調する保田に、もう一つのアジアが欠落していたのは不思議である。朝鮮や支那に対して近代化の歪みの生んだ脱亜論が變形されて継がれ、日清戦争以降の朝鮮人、支那人への蔑視の民族的なエトスに身をひたし、土着の民として占領され隷属専制させられる彼らの痛苦に目は向かない。朝鮮、大陸と歩き、民衆の現状を見ても、その襞に秘めざるを得ない痛苦を目に収めないのである。北京滞在中、案内してくれたのは高校時代からの旧友、留学中の竹内好である。その竹内には支那に対する民族的な贖罪感があつて、戦時下の「魯迅」(19年)にも色濃くたちこめていて、異境、硝煙の生々しい北京での歓談に竹内の口をつかぬ筈はないが、多くの日本人同様、保田は重大なこの一点では無恥だったのである。

さて、この大陸旅行での見聞と思案を生かしたともいえる性格も一面にあるのが、80号(14年1月)の「文明開化の論理の終焉について」である。

その「文明開化」は明治史の通念とは異なり、近代化の側面にあるヨーロッパ追随、憧憬の思潮、その思想と文化を歴史の前面に据えて否定的にみる立場からのものである。「人種改良論に始まる文明開化」という叙述もあつて、明治4年の森有札らを意識しているらしいものの、十九世紀欧米先進国の構築した文明観をモデルにする、現実的な効用実利を優先する、脱亜入欧に立つ、思想的には明六社、なかでも福沢諭吉、政治的には岩倉使節団、その実力者大久保利通に始まり、1930年代のマルクス主義によつて終ると考える近代観とみてよい。この文明開化は世界への内発的な關心から生まれたものでなく、国際情勢の刺激によつて生まれた、欧米の「付焼刃」に過ぎず、日本の近代文化は所詮は文明開化の文化、植民地文化であつて、伝統的な独自の文化は近代では成立の余地がなかつたと、保田は主張する。そ

して、詩歌の革新を図り伝統の新生も果たした与謝野鉄幹、正岡子規すら、その文学の近代化の論理は文明開化の論理であったと極論もし、「日本のまことの知性」はその象徴的な信賴対象として、美術界では天心ら院展派の画家、文学界では鷗外、漱石、藤村を選び、文明開化の論理に「反発と不平不満」を抱いていた、とも言うのである。

こういう史観の保田は、マルクス主義の崩壊に文明開化の論理の解体、時代の終焉を感得し、その旧時代の没落への激しい情熱をかきたてられる。文明開化の時代を享受して生き、生きながら文明開化に反逆する者の二律背反の生の意識を内在させての、この没落への情熱によって支えられたのが雑誌「日本浪漫派」の運動で、この運動は次にくる文化、文学への架橋の役割を担うもの、すなわち、「次の曙への夜の橋」と考え、したがって、新しい文化、文学を具体的にヴィジョンするに至らぬまま、ただ、没落への情熱によってその結実を夢みつつ旧時代の最後を飾る文学運動、「時代の青春の歌」としての反リアリズム運動を続けていたのである。

これに対し、「没落への情熱」をもたない新心理主義、主知主義等の立場の文学者はそのために、時代の進展とともに「日本主義化」し「政策文学化」して文明開化の論理から脱却できずにそこに位置し、旧態依然、欧米の「付焼刃主義」を弄し便乗し、作家として墮落したと断定する。

その対立のうちに時代は進展し、「非倫の境遇より解放」する日支事変が新しい現実となり、文化変革を促す「狼火」となっていると保田は考える。そして、この現実としての戦争は、一方に「日本の自覚」という文明的意味をもち、他方、「日本の生きる力の表現」であり、内発的な創造意思を示すものであると言う。このように戦争の性格を浪漫的な理想から純粹にとらえ、「明治以来の革新の論理がすべて文明開化の論理であつたのに対し、こんどの変革の論理は、文明開化と全然反対の発想をする論理である」ことに思念をめぐらし、反近代の立場を鮮明にして、論旨を次のように展開するのである。文明開化の論理は「翻訳と編輯がへ」の論理であり、「非創造的な専門的技術」による日本に適應させる方法であつた。しかし、創造的な文化の論理で発想するとなれば、変革の精神を歴史的に、更に神話からも探究し、幕末に眠りについた独自の日本文化を呼び醒ます必要がある。ところがそうは進まず、漢口攻略戦への作家の従軍という13年9月を契機に文学者は文学を消失させ、戦争という現実を表現する方法もないまま「政策文学」「御用文芸」

を出現させ、「日本主義」の理論的欠如が問題視されるといふ新しい状況が生じた、と。

この「日本主義」とは、国家総動員法による戦争遂行、そのための戦時体制の強化による国家目的への国民の統制と動員を促進する言論一般を指してのものであろう。この情勢に指導層は文明開化の論理の担い手であった「かつて自由主義マルクス主義であつた理論家」に、「日本主義」理論の「編輯がへ」と「翻訳」を求めて現実・戦争の理論化、組織化を始めている。しかし、終焉を告げるべき文明開化の論理による、日本の新しい現実、「非倫」からの解放という事実の理論化、組織化を図るのはナンセンスである、と結論するのである。

保田は「文明開化の論理」を揚棄することで具現する文化変革、その未来像を示しはしないものの、かつての共同体社会の暮らしの伝統の新生を求め、農本社会の文化原理の復活を願っていたことは明白である。それだけに「非倫」からの解放を求めるポレミックな姿勢がこの文章には顕著である。そして、変革に、伝統に立つ独自の発想を求める情熱の横溢ぶりが強く感じられる。また、文学を求める生の意識の初心が戦争という現実に直面して鮮烈に思想化している状況も読みとれよう。しかし、戦争観が十九世紀的な「文明開化の論理」を否定し、思念の純粹化、透徹化を図れば、図るほど国家・民族・伝統に傾斜し、当時の「日本回帰」というよりは伝統回帰の閉鎖性を内包せざるを得なくなっているのである。

4

もはや、結語も不要である。たとい文学史に名を残すのは評論家として保田、詩人として伊東、田中、蔵原、あるいは小説評論で小高根、伊藤佐喜雄、他の多くは研究者となり生活者となって市井に姿を消したとしても、「コギト」は同人にとって学生時代、プロレタリア文学とモダニズム文学の狭間から目覚めた十代、その日に懐いた文学への初心を啓培する場であり、時代とともに変容し生成する生の意識を確かめあう「共同の営為」の場であつたことを、戦時下の雑誌も如実に物語っている。

十五年戦争、その日支事変以降、同人の多くが兵士として或は文学者徴用によって戦場にゆき、中島のように戦死した者もいる。その戦争の時代、十三年の長い歲月、同人雑誌をつづけ146号に及んだのは稀有なことである。1930年代、かつてない同人雑誌の叢生期、そのはげしい興亡と離合に関りなく「コギト」に拠って「時代の青春の歌」を奏でつづけられたことは、資金提供をふくめて肥下恒夫という発行人、保田という編集人のいたことが大きな要因である。しかし、ひたむきな表現への意欲、文学への関心が同人にあり、文学者志向など念頭がない同人が多いのに、文学に純なるわが生の意識を確かめ、現実の矛盾も混乱もこれを文学に昇華させようとする詩精神が強かったことによる。 「コギト」はかかる特異な性格の雑誌で、伊東の「帰郷者」の一節を借りるなら、

詩作を覚えた私が 行為よ

どうしてお前に憧れないことがあらう

この「行為」に憧れる浪漫的青年の詩精神の発露の場であったのである。

また、保田をウルトラ・ナシヨナリストとみるのには疑念を挟みたいが、ここで見てきた範囲の戦争観にも理想追求のあまり過激な言辞が奔り、思想の定立を急ぐあまりに立論の狷介さがあり、民族の優越性の強弁もあって、そのように誤解もされれば感情的反発を同時代人から受ける要因もあり、殊に反マルクス主義の立場がそれに拍車を加えたのであらう。しかし、彼の本領とする唯美的な浪漫世界はしなやかな感性によって開示されている。保田には農本的な共同社会の風土感覚と伝統的な美感に培われた思想家という面も強くあるが、むしろ、詩精神の奔放に身をゆだねる耽美的氣質の、超脱の文人という面がその本然の姿であらう。

その保田もわが初心を確かめ、詩精神の発露する場が「コギト」であったことは、他の同人と同じである。あるいは、それ以上とも言える。深く生の深淵に湧くものを表現し、自己の世界の核となる思念情念を開示してはこの雑誌に寄稿し、自己確認を図っていたことは、「コギト」以外に発表した文章・作品と対比しても明かである。そして、ほとんど

毎号編集後記を書き、創刊号に示した初心を注ぎ、「コギト」をわが文学の出発点としていたことは疑えない。その保田に視点を当てても、この雑誌が戦時下の、単なる超国家主義の御用機関に墮ちる筈はなかったのである。